

## 「カナダの先住民政策の罪」

2021年09月24日

米国の人種差別問題は根が深く、常に、悩ましい事件が起こり続けていることが報道されている。カナダの人種差別問題については、報道されることが少なく、この問題については克服されているような印象である。ところが、岩波の月刊誌『世界』の10月号に、小笠原みどり氏が「寄宿学校の遺体と植民地国家の罪」と題して、カナダの先住民政策が犯した罪について寄稿している。小笠原氏は、朝日新聞記者として日本軍「慰安婦」制度や監視社会問題などを報道し、カナダ・クイーンズ大学で社会学博士号を取得後、現在、カナダ・ビクトリア大学教員をしておられる。小笠原氏は、下記のような報告をしている。

今年の五月、ブリティッシュ・コロンビア州にあるインディアン寄宿学校の跡地に、215人の子どもの遺体が埋められていることを、先住民族団体がレーダーによって確認し、公表した。続いて六月に、サスカチュワン州のインディアン寄宿学校の跡地に、751人の遺体が埋まっていることが分かった。どちらも、墓標はなく、先住民の子たちが秘密裏に葬られた「犯罪現場」として扱われている。

インディアンとは、15世紀末にヨーロッパから北米にやって来た白人たちが、何千年も前から暮らしていた先住民族を、十把一絡げに呼んだ侮蔑的な呼称である。彼らは、白人が入植地を広げるにつれ、居留地に押し込められ、伝統的な生活様式や文化が奪われていった。インディアン寄宿学校は、カトリック教会などキリスト教団体が運営し、「赤い人々」を文明化するとして、白人文化に同化させる目的で作られた。子どもたちは親から切り離され、彼らの母語と文化活動を禁じられ、英語が話せて、植民地産業に役立つ人間に作り変えようとされた。寄宿学校は劣悪な環境で、過密で不衛生な施設で、十分な食事も与えず、感染症などで死亡する生徒が続出していた。更に、聖職者や教師、職員による暴行、鞭打ち、性的虐待が横行した。カナダ政府の「真実と和解委員会」の聞き取り調査で、約15万人が送り込まれた139の寄宿学校で、少なくとも6000人の子どもたちが死亡したと、見積もっている。今回、発見された寄宿学校での遺体発見は、氷山の一角に過ぎないという。植民地国家によって殺された事実が浮き彫りにされ、カナダ建国の正当性に深刻な疑問を突き付けられた。カナダは、美しい自然に恵まれ、移民と難民を受け入れ、多文化が共生する国としてのイメージがあった。ところが、現実には、目を覆うような先住民への差別、抑圧、虐殺があった事実が暴露され、激しく揺れ動いている。

この問題は、遠い過去のことではなく、現在も、人種差別は起こり続けている。先住民コミュニティで育った7人の青年が、親元を離れて高校に進学した。そのうちの一人の青年が2011年、零下20度の川で発見された。ヘイトクライムに巻き込まれた可能性もあるが、警察は「溺死」として捜査を打ち切った。7人のうち5人までが、同じように川辺で、遺体で発見された悲劇を報告している。また、大学で教えている中で、権利を実現し、平等な関係を築くことを求める先住民たちの声をひしひしと感じると書いている。

小笠原氏は、日本においても、同じような歴史を形成してきたと指摘する。アイヌ民族や琉球人に対して同化政策を推し進めた。大日本帝国下で、台湾、朝鮮、中国東北部（満州）、アジア諸国の軍事占領など、民族差別を当然のことしてきた。更に、現在でも、朝鮮高校だけを高校無償化の対象から外し、アジア諸国から来た技能自習生を奴隷のように働かせる制度、外国人を犯罪者のように扱い、死へと追いやる入国管理制度などがある。これらは、かつての日本が陥ったレイシズムと同質ではないか。人間の尊厳を否定する人種差別の現実を凝視し、多様な人種が共生する社会の形成が求められている。